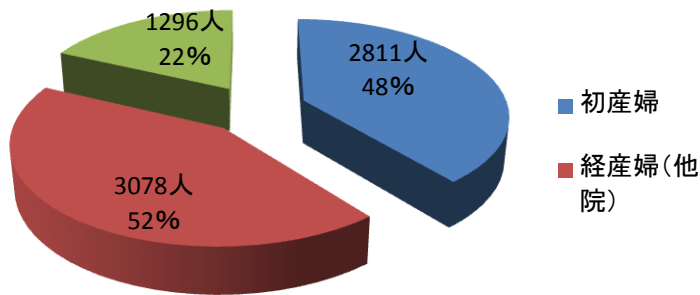


# 当院における分娩統計

2015.1

2000年(平成11年)11月の開院以来、2014年(平成26年)12月までの約14年間の間に**5889名**の赤ちゃんがお生まれになりました。今回はこれを総括し見直し皆様にご報告させていただくとともに、私どもの今後の診療指標としても活用してゆきたいと考えております。  
ご来院いただいた多くの患者様には、心より感謝申し上げますとともにお子様の健やかなる成長をスタッフ一同願っております。

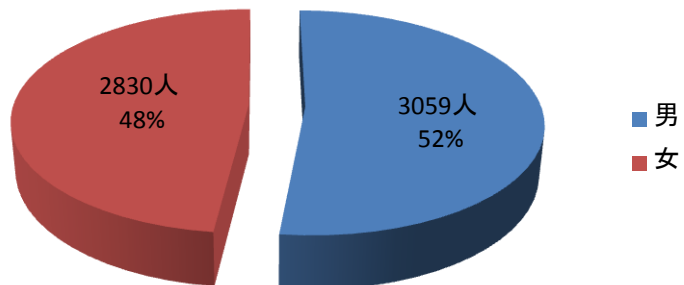
## ①初産婦と経産婦の比率(5889名)



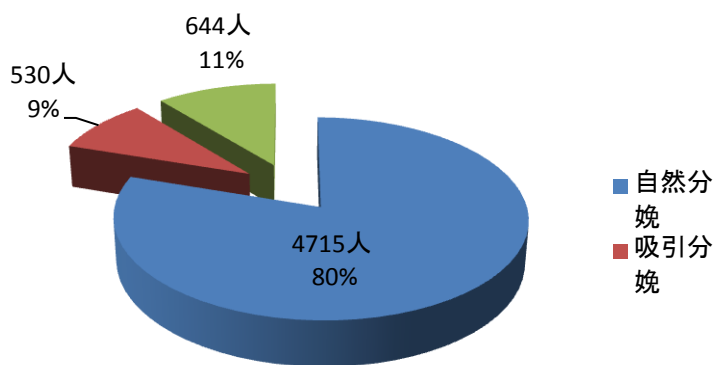
## 1. 初産婦さんの経産婦さんの内訳

総数5889名の出産のうち、初産婦さんは2811名(48%) 経産婦さんは3078名(52%)と少し経産婦さんの方が多めでした。  
経産婦さんのうち1296名(総数の22%、経産婦さんの42%)が前回も当院でお産をされているリピーターさんでした。  
その中には、当院で5名のお子さんすべてを出産された方もおられました。また、4回とも当院で帝王切開での出産をされた方もおられました。  
このように、繰り返しお越しいただけることは誠にありがたいことで、お互いの関係も密になりスムーズなお産や育児スタートに寄与したものと思われれます。

## ②出生児の性別(5889名)



## ③分娩様式(5889名)



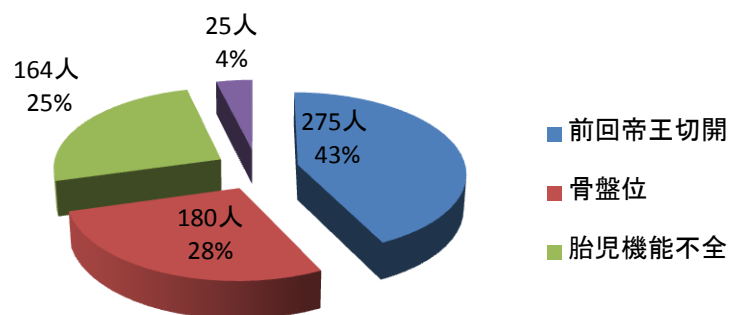
## 2.出生時の性別について

3059名(52%)が男児、2830名(48%)が女児でした。昨年の全国統計をみても、男児:女児は52%:48%でしたので平均的割合といえると思います。最近では、性別を産み分ける希望をされる方も増えていますが、環境因子やさまざまな要因が性別に影響を及ぼす可能性があるものと思われます。

## 3.分娩様式について

自然分娩(経膈分娩)で出産された方が4715名(80%)をしめています。骨盤位(逆子)や前回帝王切開分娩をされているなどの理由で帝王切開で出産された方644名(11%)でした。微弱陣痛などのために胎児が出てこれない場合や胎児の状態が不安定なために分娩を急がないと危険なために吸引分娩を選択した方が530名(9%)ありました。最近では、無痛分娩の増加に伴って吸引分娩が増加する傾向にありますが、詳細は無痛分娩の項を御覧下さい。

#### ④帝王切開となった理由（644件）



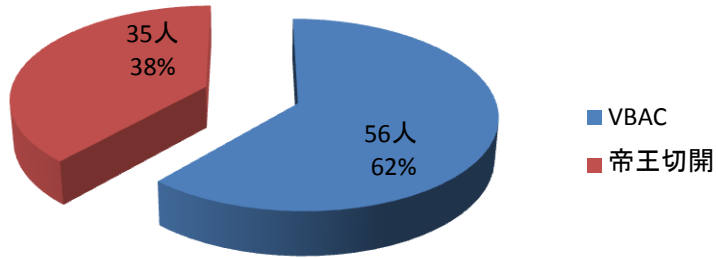
#### 4.帝王切開となった理由

帝王切開総数644件の内、前回帝王切開をうけておられる方が275件（43%）と最も多くを占めています。これには、後にお示しするVBAC(帝王切開後の経膈分娩)が不成功に終わった35件も含まれております。次に多いのは、骨盤位(逆子)が180件(28%)を占めています。その他、児頭骨盤不適合(骨盤が狭くお産が困難な場合)で164件(25%)、胎児機能不全(お産の際に赤ちゃんの状態が不安定になることです)での帝王切開が25件(4%)ありました。

最近では、出産に関しては安全性がもっとも重視されるあまりに帝王切開率が上昇しております。手術の必要性を正確に判断することは非常に重要でありますし、その選択も時によっては一刻を争うような場合もございます。

そのような中でも、当院ではVBACへの取り組みや妊娠分娩管理の充実により帝王切開率を少しでも下げられるよう努力して参りました。今後も当院での重要課題のひとつとして取り組んでいきたいと考えております。

## ⑤VBAC(91名)



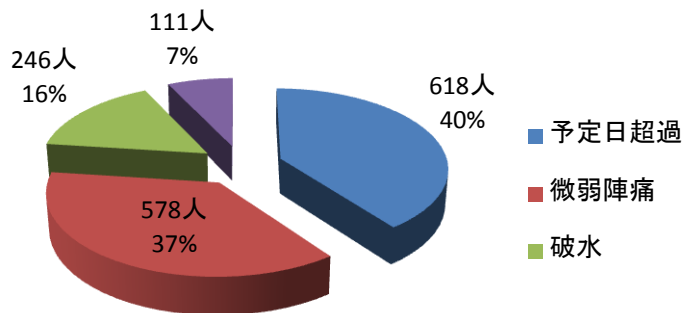
## 5.VBAC(帝王切開後の経膈分娩)

前回帝王切開で出産されていても、手術となった理由やその後の経過、また今回の妊娠の状況によっては経膈分娩が可能な場合があります。詳細は担当医にご確認ください。

当院では前回帝王切開で出産された方が326名おられ、その内**91名**(28%)の方がVBACをご希望になりました。しかし、ご希望通りに経膈分娩をされた方が56名(62%)で、残りの35名(38%)の方は帝王切開での出産となりました。

これらの方で異常のために帝王切開となった方は1名もおられませんでした。VBACでは安全のために通常のような陣痛促進が行えないために、分娩予定日をすぎても陣痛がおこらない場合は帝王切開を選択することになりますのでご了承ください。

## ⑥促進分娩の理由(1496例)



## 6.陣痛促進の現状について

当院では、原則的に自然陣痛を待ってお産をしていただいております。しかし必要があれば、母児の安全のためには陣痛促進を必要とする場合がございます。これまで、**1496例**(経膈分娩の内30%)に陣痛促進を行っております。その内訳は、分娩予定日を過ぎても陣痛が始まらず、出産が妊娠42週を超える可能性がある場合が618例(40%)と最も多く、次いで陣痛が始まっているも微弱なためにお産が進行しない場合が578例(37%)、破水後にもかかわらず陣痛がおこらない場合246例(16%)となっております。その他、計画的無痛分娩での陣痛促進を111例(7%)に行いました。一部には必要性が重複した例もございましたが、主な理由にかぎり報告させていただきます。

## 7.無痛分娩について

以前より当院では無痛分娩を行っており、これまで169例の実績がございます。

この際行う硬膜外麻酔は帝王切開時にも基本的には全例に行っており、当院では644例の実績となっておりますが、幸いにも麻酔に伴う副作用は発生しておりません。このような経験を踏まえ、平成23年より計画的無痛分娩に取り組んでいます。これは陣痛の始まる前に入院していただき、麻酔や陣痛促進の準備をしたうえで出産をしていただくものです。

この際行う硬膜外麻酔は帝王切開時にも基本的には全例に行っており、当院では644例の実績となっておりますが、この計画的分娩の開始以来133例の出産がございました。当初は分娩総数の7.5%に過ぎませんでした。一昨年は15%、昨年は17%となっております。このうち陣痛開始後にご希望があり無痛分娩に変更した症例も数例含まれております。

また、無痛分娩時には麻酔効果の為陣痛やいきみ感が分かりにくくなったり、微弱陣痛のこともあり吸引分娩を併用することがあります。昨年は無痛分娩全体のうち36%が吸引分娩となりました。一昨年の34%と吸引分娩率は横ばいでした。

今後も麻酔量の調整や、子宮頸管拡張法の工夫などにより、より無痛分娩のデメリットを減らす工夫をして行きたいと思っております。さらに皆様のご要望にお答えできるよう、お産のひとつの選択肢と捉え、これからも取り組んでゆきたいと考えております。

また、患者様へのアンケートやスタッフによる鎮痛効果や出産の評価、または自己調節鎮痛に用いるポンプの使用状況などにより無痛効果の判定を行っており、これらの結果についても随時皆様に御報告させていただいております。

ホームページにも掲載されておりますので御覧くださいませようお願い申し上げます。

